時代劇『虞美人草』

Junko Higasa

『虞美人草』は夏目漱石の朝日新聞入社後初の新聞小説である。明治 40 年 5 月 28 日に予告文を出して入稿し､9 月 7 日には脱稿後の状態を語る手紙をしたためている。人気作家の新聞小説ということで周囲の期待も高く、本人の意気込みも強かった。それだけに周囲の批評も噴出し、作者の精神的負担も大きかったのだろう。漱石書簡の中に『虞美人草はだらだら小説七転八倒虞美人草と名づけて未だ執筆中』『虞美人草については世評はきかず。みんなが六づかしいと云う。凡てわからんものどもはだまっていれば好いと思う。それが普通の人間である』上っ面で批評する者に対して『虞美人草はそんな凡人の為めに書いてるんぢゃない。博士以上の人物即ち吾党の士の為めに書いているんだ』また『小生未だ小説を脱稿せず。百回でやまざる故どこまで行くか夫子自身心元なし』まじめに働いている民が猿まがいの食糧しか得られず、財閥が米を食っている世を批判し『終日人の事業の妨害をして(否企てて)そうして三食に米を食っている奴らもある。漱石子の事業はこれらの敗徳漢を筆誅するにあり』とある。勇んで書き始めたはいいが、執筆中に周囲の雑音と自身の筆の収拾に少々嫌気がさしたと見える。この作品は「技巧に懲りすぎたところがよくない」と漱石自身回顧している。しかしそれでも漱石は最後に当初の目的通りの theory(論・説)を展開し大団円を成し遂げた。確かに解る者にはわかる。解らない者にはわからない小説である。

さて、「技巧に懲りすぎた」ということであるが、それは感じる。K 先生から「朝日新聞は大阪と東京にあり、双方の読者に対する漱石のサーヴィス精神が発揮されている」と聞き習った通り、今までの作品で美術や海外の歴史を作中にふんだんに取り入れた漱石は、本作では日本の歴史―関西では京都人に染み込んだ歴史を―関東では東京人に染み込んだ歴史を作中に忍ばせた。さらにその文章展開は正に舞台を鑑賞しているように感情をいざなっていくような美的表現で綴られる。『テニソンの詩の調子のミュージックだけはよく判る』と言った漱石らしく、序曲から物語が進行するにつれて期待を膨らませ沈ませ走らせ結末に持って行く手法は、漱石の音楽性と詩性の現れであって、全ての藝術に通じるだろう。漱石は小説という舞台の上で「相続におけるお家騒動に絡む恋愛事件」という文章芝居を展開する。そしてその中に人間の大事なテーマを忍ばせる。社会においては当時の家督継承条件と女性の地位に関する問題点。人間においては義理と人情と現実生活の不一致から生まれる葛藤。一見恋愛小説でありながら、そこに在る人間社会の問題を鋭く指摘し、最後にどのように生きるべきかを論じて、読者の心に問いかける。技巧に懲りすぎたというのは「読者サーヴィスのために歴史を広げ過ぎたこと」と「芝居仕立ての文章の美的表現を盛り込みすぎたこと」という点にあると思う。おそらく芝居は盛り上げるより、それをうまく落ち着かせながら感動を残す方が難しいだろう。盛り上がりがガクンと落ちたらそれまでの感動は一気に消える。広がり過ぎたものを滑らかに収拾するにはそれなりの稜線が必要だから、執筆期間が長くなったことも頷ける。下手な芝居は最後に余計な説明的場面を加えるが、漱石は悲劇で気の抜けた最後に、気持ちを引き締める重要な一場面を展開した。そこにこの時代劇的恋愛小説の成功があり、大いなる価値がある。(2013.6.15)